

Going my way!

ADULT ONLY



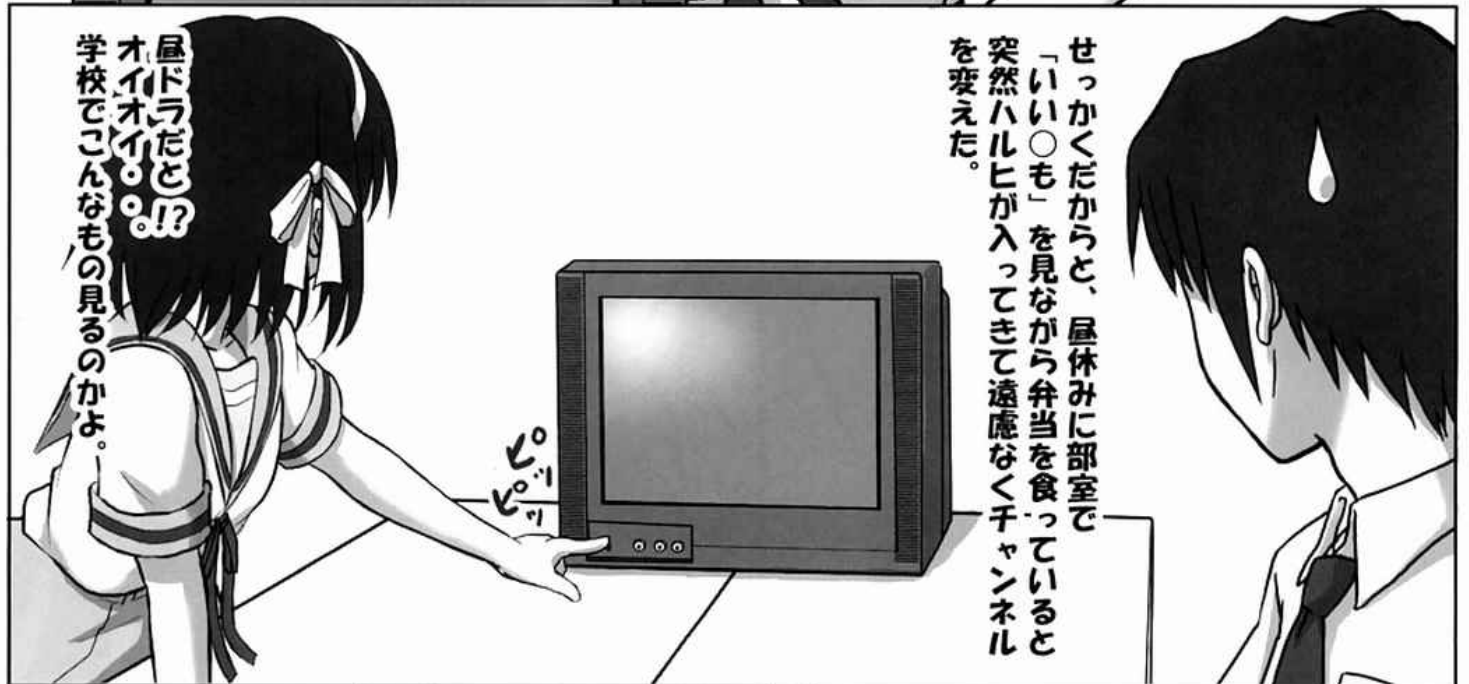
キョーン！
テレビを見られるように
しなさいっ！

ハルヒが突然部屋に
テレビを持ってきた。
コイツ、今度は何処から
盗んできた？



せっかくだからと、昼休みに部屋で
「いい〇も」を見ながら弁当を食っていると
突然ハルヒが入ってきて遠慮なくチャンネル
を変えた。

昼ドラだど？
オイオイ！！
学校でこんなもの見るのかよ。



昼ドラといえは約束の愛憎劇と
ベッドシーンなわけだが・・・、
映し出されたのは2人の男女が
ベッドでうごめく、まさに最中の
シーンであった。

思わず俺は目をそらしてしまったが
ハルヒのヤツはじっと画面を凝視
している。
恥じらいってもんが無いのか・・・。

部屋に気まずい沈黙が流れる。
・・・何がしたいんだコイツは・・・。

・・・
ねえ、キョーン

ん？
なんだ？



はあ？



あなた
キスしたことがあるの？



あ、あるに決まっ
てるじゃない！
男なんでも引く手あまた
だったしね！

.....
ご推察の通り俺にそんな経験は
無いが、そういうお前こそ
経験はあるのか？



ないでしょ！
ないに決まってるわっ！

アంత全然もて
なさそうだもん！
染まいっ！

な、何だ！？
何を突然言い出すんだ
コイツは？



ごっごっ！
もてないアంతタに
救済処置よー！

とっ、特別に あ、あ
たしと キツ・・・
キスさせてあげるわっ！

な、何だと？！



これは神がアంతタに
与えた人生最大の
ラッキキーよっ！

べっ別にアంతタとキスしたい
とかじゃないんだからねっ！
もてなさそうなおアంతタが
哀れだから仕方なくしてやる
んだからっ！

どんな理屈だそれは……。
コイツ、俺をからかってんのか？



半ば口内レイフのような行為に段々と俺の思考ももろろうとしてきた瞬間、っ!?
オイオイ、そりゃマヌイだろう!!
この不条理な行為を何処までエスカレートさせる気なんだコイツは。

ぎゃっ

ふふっ
何々あんた興奮してんの?

いやらしい想像でもしたんじゃないの? このスケベッ!

返す言葉もない。
俺の愚息は理性に反するかのよう
に直立不動状態であった。
こんな状況なら健全な男子高生で
あれば誰だっってこうなっちゃう
・・・たろ?

ありがたく思いなさいよねっ

そう言ってハルヒは服を脱ぎだした。
今ならこの状況から逃げることも
出来るが・・・

ホントしようがないわね
今日は特別にソントタの
好きにさせてあげるわ

これ以上の行為に及んでしまう怖さももちろんあるが、
ここまできちまったら自分の欲望には抗えそうに無い・・・

恐る恐る手を伸ばし、
あらわになったハルヒの胸を
もんだ。
一瞬、可愛い声を上げる。

んっ♡

ぽん

や、柔らかかけえ♡♡♡
朝比奈さんのマッシュマロのような
胸も魅力だが、ハルヒのじっかりと
張りのある胸もまた魅力だ。
しっとりとした汗ばんだ肌が余計に
弾力を手に伝える。

俺は夢中で胸を揉んだ。
揉む度にハルヒもそれに
呼応するように小さく
声を上げる。
でも、それが恥ずかしいのか
懸命にこらえている感じだ。
いつも強気なハルヒとは
思えん。

あっ

んっ

んっ

ぽん

ぽん

くそ、カワイイじゃないか...



俺はもっと声を聞きたくて
勃起した乳首に触れた。
瞬間、ハルヒの体が
跳ね上がった。

あっ!?

ピ、ピクリした
ハルヒのやつ、
乳首が感じやすいのか



ひあっ!!

俺は我慢できず
胸におしゃぶりついた

おしゃぶりの
おしゃぶりの



あっ!!

はあっ!!

んん!!!

俺は楽しくなって乳首を
攻め続けた。
さっきとほうって変わって
ハルヒは激しい声を出す。



ハルヒは身じろいで抵抗しようとするが、さっきのキスのお返しとばかりに激しく乳首を吸ってやった。



き、キスののむせぬ、上手いじゃない。ア、アタシもちみつと感じちゃったかもね。

あんなに乱れておいてまだそんな憎まれ口を言うか。まあ、ハルヒらしいと言えはハルヒらしい。だが今はそんな態度も逆に可愛らしく思えます。



いい加減、吸い疲れて口を離れた時にはハルヒのヤツはくったりとしていた。... ちょっと調子に乗りすぎたか...



ちよっ!?

この調子で主導権を握ってやろうと、ハルヒの足をかかえて恥ずかしいポーズをとらせる。



始めてみる女性のアソコをどっと指で開く。ハルヒのは綺麗なピンク色で毛も薄くまだ未成熟といった感じに見える。突起してる部分があるがこれがクリトリスってやつか？



こんなのも経験済みなんだろ？

と、当然じゃない！

ある意味、扱いやすいな
コイツ……。

俺はそっと舌を返させた。
瞬間、ハルヒの体がビクンと躍動する。
舌先でクリトリス部分を転がすように舐め
まわすと、より激しく反応した。
やっぱりここが一番感じる部分なのか。
何となくコツをつかみ、舌と唇を使って
丹念に愛撫してやる。
ハルヒはもう恥じらう余裕もないくらいに
激しく悶えている。

俺の唾液とハルヒの愛液とで、すでにアソコは
グショグショに濡れていた。



俺は更に強く舌を絡ませる。
唾液と愛液がからんで、いやらしい音が
部屋に響く。
それとともに段々とハルヒの息遣いも
激しくなってきた。
ひゅっとしてイクのか？
こうなったら何としてもコイツをイカせ
てみたくなってよりいっそう舌を動かし、
指先でもクリトリスを刺激した。
突然、ハルヒの体がビクビクと痙攣し、
突っ張った。
しばらくするとそのまき凍りついていたハルヒの
体からガクッと力が抜けた。



どうやらイッたようだ。
ハルヒは呼吸するのがやっとなって感じて、
虚ろな表情をしている。

あのハルヒがこんな表情を見せるなんてな。
何か一仕事終えたって感じて、妙な満足感が沸き起る。

しかし一方で俺のアソコはもう
すでにはちきれんばかりになっている。
コイツを満足させないことには
もう、気持ち的にも収まりがつかない。。。。

ハルヒ……
いい、入れても
いいか？

……
痛くしたろ
死刑だから……

濡れたアソコに俺のモノ
をあてがう。
入り口はここでいいの？
はやる気持ちを何とか落ち着け
俺はぐっ、と腰を前に押し進めた。

ぐっ

くっ、キツイ。
しかし、十分に濡れているせいか、徐々にではあるが
奥に入っていく。
ハルヒは痛みをこらえているようで、苦しげな声を
出している。
「コイツ、やっぱり初めてなんじゃないのか？」
俺が問うと、
「平気よっ！」
の一点張りだ。

ああ……

んん……

スマンと心の奥で誤りつつも、もう俺の方は
欲望に抗えそうにない。なるべくゆっくりに、
ハルヒの様子を伺いながら腰を進めていく。
異様に長いような短いような感覚の中、
ようやく根元まで入った。
ハルヒのヤツも入れはじめの頃よりは痛みに慣れたのか
徐々に落ち着いてきたようだ。
しかし、俺の方も簡単には動けない。
あまりの気持ちよさに気を抜くと
あっといふ間にいっちょまいそうになる。

びびびび

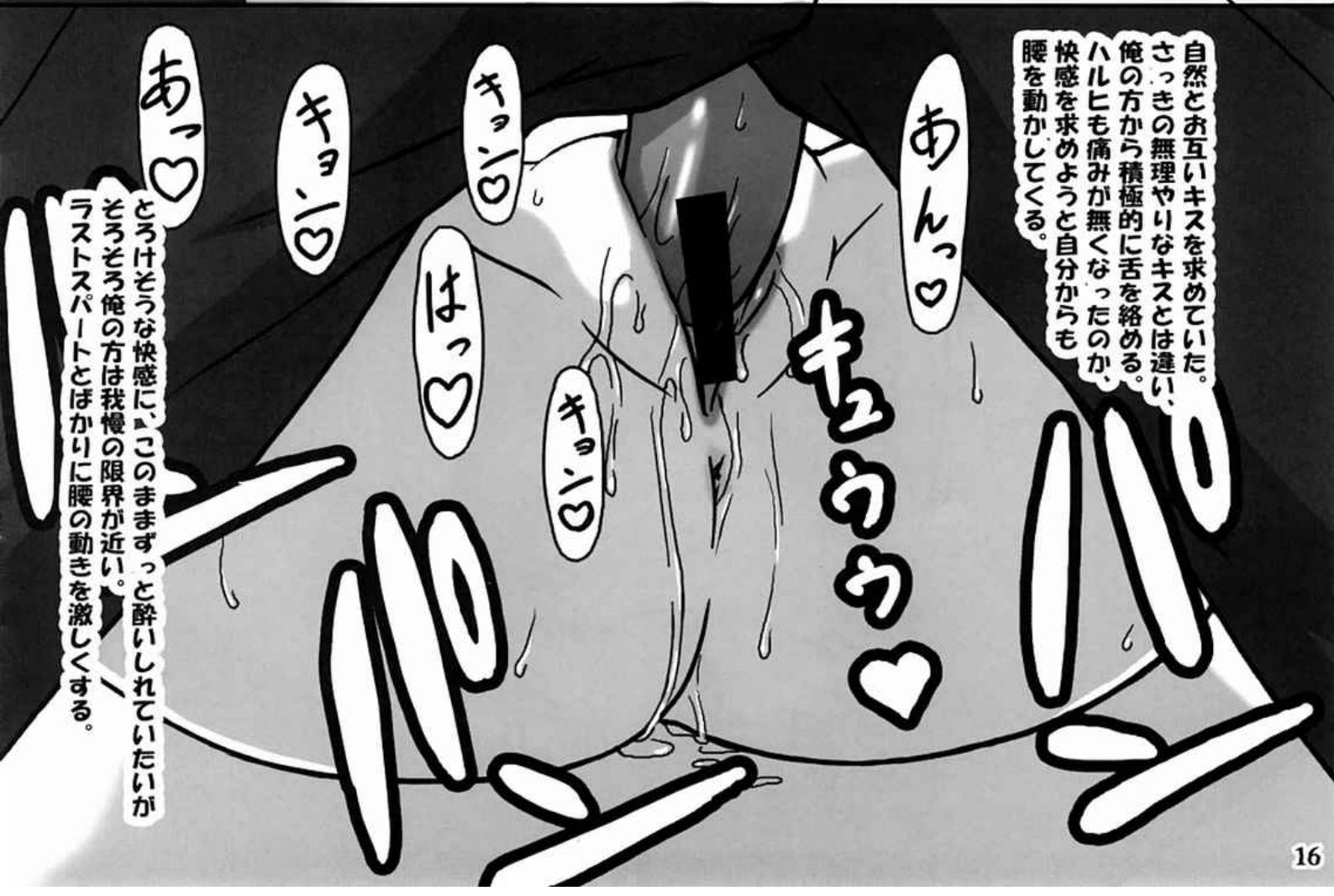


ヌルヌルとした感覚と強烈な締め付けが俺のアソコを襲う。何度も達したい気持ちを抑えながらそれでもゆっくりと、ほんの数ミリ単位で腰を前後させる。

徐々にハルヒの苦悶の音があえぎ声に変わってきた。

びゅん

びゅん



自然とお互いキスを求めていた。さっきの無理やりなキスとは違い、俺の方から積極的に舌を絡める。ハルヒも痛みが無くなったのか、快感を求めようと自分からも腰を動かしてくる。

とろけとろけな快感に、このままずっと酔いしれていたい。そろそろ俺の方は我慢の限界が近い。ラストスパートとばかりに腰の動きを激しくする。

あーっ
うんっ
うんっ

んん
あーっ
うんっ



んん
あーっ
うんっ

んん
あーっ
うんっ



まるで夢だったような出来事から翌日。いつもと変わらない態度のハルヒが振り向きざまに言った。

アンのきょうの運勢、昨日と同じくらいラッキーだっことよ。またお昼に部室ねっ！来なかったら死刑だからっ！

最後までご覧下さり、有難うございました。

奥付

発行：するめの丘

発行者：之之之之

発効日：08/4/20

HP：<http://www.ric.hi-ho.ne.jp/surumenooka/>

mail：yukinokoreyuki@mail.goo.ne.jp



Melancholy of Haruhi Suzumiya

presented by するめの丘